



マダガスカルにおけるナショナリズムの高揚 ——その連続性と重層性——

Exaltation of nationalism in Madagascar: Its continuity and multi-layers

山田 祐

Tasuku YAMADA

【要旨】

本論文の目的は、マダガスカルにおいて独立期までに高揚したナショナリズムによる思想と社会運動を分析し、その歴史観を再構築することにある。マダガスカル共和国はアフリカ大陸東岸 400 キロメートル、インド洋の南西端、南緯 11 度～25 度、東経 43 度～50 度に位置する 58 万 7295 平方キロメートルの国土を有する島国である。マダガスカル島は Gondwana 大陸より 7000 万年前に分離したことから、最も近い大陸であるアフリカ大陸とは異なる生態系を発展させた地域として知られている。今日ではそれらを利用した観光地としての側面が取り上げられることが多いが、人類史から見ても、マダガスカルは他地域とは異なる歴史を展開させた島である。マダガスカルへ人類が定住を始めたのは 1200 年前と比較的新しく、当時より現在に至るまでアジア、アフリカ大陸からの移住者によって歴史が形成されてきた。マダガスカルにおける人類は、諸文化による自己認識、他者認識によって複数の民族集団を創生したが、フランスによる植民地化によってマダガスカルに住む人びとの認識は大きな変化を迎えた。その変化のなかナショナリズムは興隆し、マダガスカル人という国民認識が現れた。

キーワード：マダガスカル、ナショナリズム、植民地時代

1. はじめに

1-1. アフリカの植民地化

帝国主義という言葉は現在、言語表現のなかで普遍的に使用される。しかし元来の歴史学的文脈によると、レーニンによって下記 5 項目の特徴から定義される。(1)生産と資本の集積が、経済生活で独占を作りだす。(2)銀行資本と産業資本の融合による金融資本を土台とする金融寡頭制が成立する。(3)商品輸出にかわり資本輸出がとくに重要な意義を獲得する。(4)資本家の国際的独占団体が形成され、世界市場を分割している。(5)最大の資本主義列強による地球の領土的分割が完了している(Lenin 1917)。以上のような帝国主義的戦略で植民地を所有し、広範囲な異民族を統一的に支配した帝国は、イギリス

とフランス、ドイツ、ロシア、アメリカ、イタリア、ベルギー、日本の 8 ヶ国である(木谷 1997)。これら列強による植民地獲得競争は 19 世紀のおわりに最高潮に達し、20 世紀初頭、全植民地面積が地球の総面積の半分以上を占めるに至った。

植民地とは古来、入植後の新天地であるとされ、本国から離れた移住地であった¹⁾。しかし 16 世紀以降の近代における植民地とは、法律的、経済的に本国に結びつけられた遠隔の土地であり、支配地に近く、植民政策が帝国主義に混同、もしくは包含されるのもこの頃である(デシャン 1954)。このような近代的植民地の増殖は、時代を経るごとの需要²⁾の高まりによって引き起こされることとなる。

ヨーロッパの近くに位置するアフリカにお



図1 1920年前後のアフリカにおける
西欧諸国の植民地と委任統治領図

(著者作成)

いても、帝国主義及び植民政策は他人ではなく、むしろ西欧列強による植民政策の中では最も影響を受けた地域であると言えるだろう。図1は20世紀初頭のアフリカにおける西欧列強による植民地図である。エチオピアとリベリアを例外として、アフリカ全域はヨーロッパ諸国の植民地となっていた。ヨーロッパ人がアフリカの西岸より南下をはじめたのは、およそ15世紀である。しかし彼らの当時の目的はインドへの航路を開くことであり、アフリカでは沿岸部にいくつかの拠点を設けるのみで、奥地へは入らなかった(宍戸1962)。18世紀に終了した奴隷貿易と期を同じくして、西欧によるアフリカへの植民が開始される。アフリカにおいて最も多くの植民地をもったのはイギリスであり、フランスがこれに続き、ベルギーやポルトガルも本国の数十倍の面積の植民地を保有した(宍戸1962)。

西ヨーロッパ諸国による植民地統治は、宗主国や地域によって特色が異なり、それぞれ経験主義や家父長主義、同化主義と呼ばれる。

第一の経験主義の最たる例は、イギリスである(Hodgkin 1956)。イギリスは、ヨーロッパとアフリカの文化が全く異なることを認め、宗主国

は後見あるいは指導にとどまるべきとした(西川1971)。イギリスは最終的な目標としてアフリカ人に全ての自治を任せることを置き、各地域に合った政策で間接統治を実施した³⁾(宍戸1962)。これはのちにアフリカ各国で起こるナショナリズムの発展にも、地域ごとに柔軟に対応できることを意味し、大戦後のイギリスは比較的平和裏に政権を移行した。

第二の家父長主義たる国はベルギーやドイツなどがあげられ、本国が直接統治を実施するが、本国への同化は認めない統治体制をとった。

第三の同化主義にはフランスがあげられる。フランスは本国、もしくは附属行政機関が植民地を統治し、現地人をフランス市民に同化させることを最終目標においた。同化とは具体的に、教育水準や政治制度を本国に近づけ、フランス市民となり、代議員を本国議会に送らせることである(西川1971)。

以上のように、三つの主義には統治体制の差こそあったが、植民地を本国市場に結びつけ利益をあげるという根幹の目的はどの国においても相違はなかった。宗主国に依存するこのような植民地経済体制は、以前に存在した独自の経済と地域市場を破壊し、独立後の不安定な経済構造を招くことになる(西川1971)。

1-2. フランスによる植民地統治

フランスの植民地では、地域ごとの統治方式に差異が少なく、多くの場合フランス人の行政官によって直接統治された。フランスは、アフリカに住む人びとがフランス式の統治体制、社会施政、文化などによって感化され、フランス人社会に徐々に吸収されていくことを支配の目的とした。フランス式の教育を受け同化した同化民は、フランス人と同様に市民権を与えられ、参政権をもつことができた。しかし、これは名目上にすぎず、実際に市民権を得ていた現地民はごくわずかであり、現地民は強制労働や集会、結社、出版の禁止など多くの抑圧を受けていた。これらの多くの負の側面は1944年のブラザヴィル会議で是正されたものの、「フランス帝国と離れての発展の可能性をいっさい排除し、自治は遠い将来であろうとも排除されるべきである」と当時のフランス人によって述

べられていることから、同化主義という路線はフランス植民地帝国時代末期まで根強く残った(宍戸 1962; ヤコノ 1998)。

フランスを含め、欧米列強による植民政策の根本には、植民地支配の過程を文明化と表現してきた歴史がある(ヤコノ 1998)。「優れた」ヨーロッパが、「遅れ、劣った」人びとに文明をもたらすという考えである。彼らは自分達の植民地の征服、領有という行為を正当化するために、「(文明化は)白人の責務である」との論理⁴⁾で支配を表現してきた。特にフランスでは、「文明化の使命」という名のもとに植民地支配が正当化され、国民に向けても幅広く宣伝されてきた(平野 2002)。その結果、フランス人にとって植民地という存在は帝国たる所以の産物であり、フランスの偉大さの一要素であると信じられる(渡辺 2001)と同時に、いつしかフランスには「文化の伝播者」として、植民地における文明化を推し進める使命感があふれていた⁵⁾。支配や暴力といった抑圧的な側面のみが存在する植民地ではなく、文明化させた野蛮人を国民としてフランスに迎え入れるための人道的な植民地、これがフランスの同化の大枠のコンセプトであった。

フランスは、同化の名のもと、植民地における選挙権の付与、フランス語の普及をはじめとする文明化を実施した(平野 2002)。フランスが文明化によって救い出さなければならないと考えた野蛮人とは、個人という認識をもたず、社会や民族や国民を形成できない者たちである。彼らは集団をつくるのみであり、そのような段階から彼らを国民や個人と呼ばれる存在へと昇華させることが、フランスの責務であると考えられた(バンセルほか 2011)。

1-3. 植民地としてのマダガスカル

マダガスカルは、1896年にフランスによって植民地化されたインド洋に浮かぶ島国である。広大なマダガスカルの国土において、気候条件に起因する自然環境の差異は、同時にそれらに応じた地域ごとの生活習慣の差異も生みだしている。たとえば生業ひとつをとっても、水田稲作に依拠する地域もあれば、焼畑耕作に重きをおく地域もある。墓や家屋の作り方や各種儀

礼の実施方法にも地域ごとの差異が見られ、こうした観点から見れば、マダガスカルの人びとをいくつかの文化的まとまりによって区分することは可能である(森山 2013a)。しかしそれら人類学的判別法とは別に、マダガスカル人をいくつかの集団に分ける前植民地時代から続く区分、民族が存在する。日常会話で“*foko*(フク)”⁶⁾と称されるものがそうである。

foko は、解釈によって 15 から 25 の区分が存在するが、現代のマダガスカルにおいて一般的には 18 と数えられる(デシャン 1989, 森山 2006)。各民族の成員は所属する民族との一体感をもっているか、もしくは文化面で他民族とは異なる共同体に所属していると認識している(デシャン 1989)。現在までマダガスカル人による個人の民族認識は続いている一方で、デシャンによってマダガスカル人の言語的および文化的一体性の根深さと言及されているように(デシャン 1989)、マダガスカル人としての大枠の認識も存在する。例として、森山(2006)によれば、以下のような植民地行政下で育った男性の言葉の記述がある。「シハナカ民族やメリナ民族などという言い方をする。けれども *foko* は何かと尋ねられたら、わたしはこう答えたい。わたしはマダガスカル人であると」(森山 2006: 6)。

マダガスカルはそのはじまりの歴史から移住者によって形成された社会である。マダガスカル島がゴンドワナ大陸より 7000 万年前に離脱してから数千万年間、人類は島内へ到達していなかった。当地へ人類が定住を開始したといわれる 8 世紀の終わりから、東南アジア、中東、アフリカより、絶えず移住は繰り返されてきた(飯田 2012)。近代になると、そこにヨーロッパが加わることとなる。植民地前時代に成立した 18 の民族は、そのような移住のなか自己認識と他者認識によって出現した考え方である⁷⁾。ではマダガスカル人という統一的なアイデンティティーは、いつ、何によって誕生したのだろうか。

今日マダガスカルをはじめとするアフリカ諸国において、自国民を形成するための認識の思想、ナショナリズムは、西欧諸国による植民地支配の結果、多くはその支配に対する反発の結果、誕生したと言及される(川端 2002)。マダ

ガスカルでは、同化政策を主軸にしたフランス政府が全島を植民地として支配していた。アフリカ史の文脈に沿えば、植民地前時代における他者との関わりによって誕生したマダガスカル各地の民族とは別に、国民としてのマダガスカル人という概念を生みだした存在は、周辺に寄り添う隣人集団ではなく、暴力によって武装した遠く離れた異国の他者集団であることになる。他国の人類史より相対的に浅い歴史のなか、他者認識の過程で短い間に民族を位置づけることができた人びとにとって、マダガスカル島を枠とした人類集団を意識することにフランス植民地時代まで時間が必要だったのかは疑問が残る。

1-4. 1947年マダガスカル反乱

現代マダガスカルにおける国民は、民族認識と国民認識をととももっている。植民地前時代には異なる領域に密集して暮らしていた民族集団は、近代になると移動を繰り返し混在してしまった。しかし現代のマダガスカル人も、民族は何かと問われれば、即座に自らの民族を返答する人が多い。男系に継承される民族名は、例えば日常会話のなか、「ベツレウ⁸⁾の主食はコメだが、タンドロイ⁹⁾の主食はキャッサバやトウモロコシだ」などその民族の一般的な特徴とともに、今なお認識されていることを鑑みることができる。同時にマダガスカル人としての国民認識も大切にされる。例えば自らの外見的言語的特徴に東南アジアとの近似性を見出すことなど、大枠としてのマダガスカル人を意識している発言は活発である。

現代のマダガスカル人による民族意識と国民意識の共存する状態が、フランス植民地時代に帰ると言及される場合は多い¹⁰⁾。マダガスカル人の国民意識、つまりマダガスカル島を地理的境界として、島内に住む人びとを一集団として認識する思想、ナショナリズムはいつ成立し、民族意識とどのように共存し、現在に至ったのか。本稿においては、マダガスカル人の並列する意識が、時代とともに変化しつづけたという仮説とともに、その意識の覚醒として1947年に起きたマダガスカル全土を巻き込むフランスへの反乱を位置づけ、マダガスカル

のナショナリズムの高揚について論ずることを目的とする。

2. マダガスカル

2-1. マダガスカル島

マダガスカル共和国はアフリカ大陸東岸 400 キロメートル、インド洋の南西端、南緯 11 度～25 度、東経 43 度～50 度に位置する日本の 1.6 倍ほどの面積、58 万 7295 平方キロメートルの国土を有する島国である。7000 万年前に大陸より孤立したマダガスカル島は、最も近いアフリカ大陸とは異なるユニークな動植物相を發展させた個性的な生態系をもつ島として知られている。人類や捕食動物の不在によって繁栄したキツネザル類をはじめとする多種多様な生態系は現在、マダガスカルでは観光という形で利用されている。しかしマダガスカルは、生態系における特異性のほかに、人類学的にみても特異性の際立つ場所である。

2-2. マダガスカルの民族集団

マダガスカルは人類が最後に到達した土地のひとつとも称され(深澤ほか 2013)、アフリカ大陸のほか、ユーラシア大陸や火山諸島を周辺にもつが、一番近いコモロ諸島でも 300 キロメートル以上離れた孤島である。人類発祥の地であるアフリカ大陸を最も近い大陸として持ちながら、人類の定住は 1200 年ほど前と他地域に比べその歴史は新しい。最初の定住をはじめとして、インド洋を通じたアジア、アフリカ世界からの影響を受け続けたマダガスカルは現在、アフリカ地域に属しながらも、アフリカ大陸とは異なる人類史を歩んできた。それらは例をあげれば、オーストロネシア語族マレー、ポリネシア語派に所属するマダガスカル語、東南アジアからもたらされた稲作などに象徴される。

マダガスカルにおける人類は、その移住元や定住先などの諸要因によって、いくつかの集団を形成した。マダガスカル植民地化以前にほぼ確定したそれらの人類集団は、マダガスカル人全体をさす国民という名称とは別に、*foko*(邦訳

では民族)と呼称される。マダガスカルにおける民族は一般的に 18 種類とされ、その領域は図 2 のように区分することが可能であった。しかし 19 世紀以降、メリナ¹¹⁾の征服戦争に機を端する諸民族の移住、および文化的攪乱により図 2 が過去のものとなった所以である。このような攪乱は植民地時代前後より過激となるが、広範に移動した人口過密地域出身のベツレウ、メリナなどがあるなか(デシャン 1989)、現代でも過去の民族図における所在地に変わらず同心円状に広がり続けるチミエティ¹²⁾なども存在する。

歴史的もしくは地理的にも、本質的な同一性を有する集団がこの民族区分法には多い一方で、文化的領域に応じた区分法も存在する。文化人類学、あるいは民俗学において引用される本区分法はアメリカの文化人類学者リントンによって定められた。図 2 の①は東海岸地域であり、高床式の家屋と倉庫、水田耕作と焼畑耕作¹³⁾などに象徴される。図 2 の②は中央高地地域であり、丘上の環濠集落と平土間家屋、苗代の造成と移植による水田耕作などが特徴的である。図 2 の③は西海岸と最南地域であり、平土間家屋、イモ栽培や牛牧畜の重要性、アウトリガーカヌーなどがあげられる。ただし以上の文化領域が重なり合い、中間的な特徴を示す地域もあるとされている(森山 2013a)。本稿においては、特に歴史的に明言する必要がある一部の民族についてのみ下に記す¹⁴⁾。

図 2 の②の中心部に暮らすメリナは、マダガスカルの歴史を記す上で非常に重要な集団である。メリナの祖はアジアより東海岸部に、のち内陸部に入り、16 世紀ころから王国を形成し始めたと伝承される。18 世紀には小規模であったメリナ王国も、19 世紀に西ヨーロッパ諸国の支援を受け、島の約 3 分の 2 を征服するに至る。征服戦争のなか、連れ去った奴隷や、各地方への移民、そしてそれらに抵抗する移住などが、現代の島内民族攪乱に繋がっている。19 世紀末期のフランスによるマダガスカル島征圧に際しては、メリナの敗北によってマダガスカルの植民地化が決定し、メリナ王国も終焉した。メリナは水田耕作によって稲を育て、副業として牛を飼っている。農民であるメリナの人びとは、同時に商人や役人、移植者でもあり、現在では

島のあらゆるところに広がり、社会的地位の高いものが多いとされる。メリナの近現代における社会的役割については後述するが、植民地前時代に支配民族として台頭したこと、その後現代に至るまで行政の中心に位置した役人の多くがメリナである、もしくはメリナであるとみなされていることから、マダガスカル史におけるメリナの役割は大きい。メリナは最も数の多い民族ともされ、人口は 1975 年時点で 200 万人ちかく、ベツレウとあわせて最大グループを形成した(デシャン 1989)。

メリナとおそらく文化的に違いがないとされる集団がベツレウである。地理的にはメリナの周縁の図 2 の②に位置づけられ、生業もメリナと同様である。ベツレウはメリナに征服されたことで、被支配民族として自らを意識し、集団を形成していったという(森山 2013a)。ベツレウは 1975 年時点で 90 万人ほどであった(デシャン 1989)。

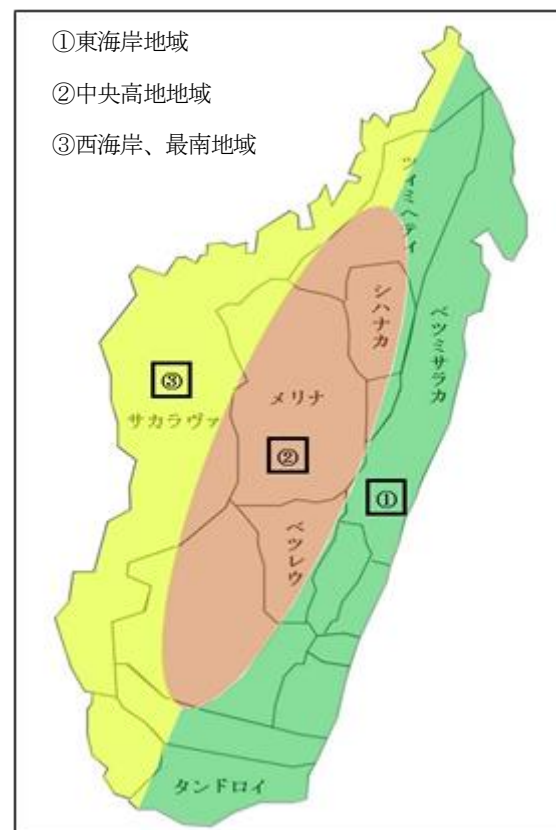


図 2 本稿で扱う民族領域とリントンによって定められた文化領域図
(デシャン 1989: 78)を一部改変)

サカラヴァは図2の③に位置して古くより西海岸部全域に広がった民族である。サカラヴァは15世紀末よりいくつかの王国を形成しそれぞれ発展するが、19世紀にメリナ王国によってその多くが征圧されている。メリナによってサカラヴァの諸王は地方行政長に命じられ、その血統は要職を世襲し現在まで続いている(杉本2013)。サカラヴァ王国はメリナ王国とともにフランス植民地政府によって廃止された。

サカラヴァの居住領域は南北に広く分布し、異なる気候ごとに生業は多様に変化する。牧畜を中心とする者、稲作を中心とする者、漁労を中心とする者など様々である。サカラヴァの1975年時点での人口は約20万人であった。サカラヴァの過去の領域は、マダガスカル民族のなかでも広範であったが、人口は比較的少ない。当地では近代以降、水田耕作地の開発需要の高まりや中央高地における人口増加などの諸要因によって、メリナやベツレウなどが植民し混在がおこっている。

他に図2の①に南北に広がるベツミサラカ、図2の②の北部に現在も暮らすチミエティ、図2の③の最南部でトウモロコシやキャッサバを育てるタンドロイなどが存在する。マダガスカルにおけるこれら民族集団の祖は、紀元後に海洋を超えてきたアジアあるいはアフリカの人類であり、土着の住民は存在しなかった。

2-3. マダガスカルの歴史

1) マダガスカル近代前史

人類がマダガスカルに定住したもっとも確実な証拠となる遺跡は、8世紀終わりころのものである(飯田2012)。しかし人類のマダガスカルへの到着がいつかという問いには、いまだ明確な答えはない。彼らの渡来は、動物の骨化石についていた金属器の使用痕の発見などから、紀元前まで遡ることがうかがい知れるのみである。また初めて島に到達した集団は、言語や文化の側面から、東南アジアより遠洋航海によって至ったと近現代では多く考えられている(飯田2012)、それも参考程度である。詳しい史料・資料の残らないマダガスカル先史においては、東南アジアやムスリム文化圏、アフリカ東海岸部の3世界より断続的に移住の波があっ

たと考えることが妥当であろう。

前述の定住の証拠である8世紀の遺跡は、北東部ヌシマンガベ島に所在する住居跡である(飯田2013)。ヌシマンガベ島遺跡からは、定住を示す焼畑耕作跡のみならず、西アジア産の陶器片も出土している。のち9から11世紀の時代の遺跡は、北東部より北部アンパシンダヴァ湾周辺へ広がり、同地からはペルシャや北西インド産の陶器片が出土している。このことから、インド洋を通じたアジア世界からの最初期の到来者は、北・東部を中心として繁栄していたことがわかる(鈴木2013a)。彼らはそこに住み続ける者もいれば¹⁵⁾、海洋交易を捨て中央高地に進出する者も現れた¹⁶⁾一方で、バントゥー語系の人びとは西海岸を中心に広がっていった。彼らの多くは、スワヒリ語を話す商人であり、時代とともにマダガスカル島の北や東、南の3方向へ進出し、それぞれ王朝を創始した¹⁷⁾(デシャン1989)。19世紀ころまでにはマダガスカル各地に王国が乱立し、メリナによる征服戦争まで、いくつもの民族間での戦争と併合が繰り返された。

2) マダガスカルと西欧諸国

マダガスカルにおいて中心的な役割をはたしたヨーロッパの国は、イギリスとフランスである。しかし最初期にマダガスカルに到達したヨーロッパ人は大航海時代である16世紀のポルトガル人とオランダ人である。初めの1世紀、ヨーロッパ人はマダガスカルを食料や水分の補給のためにのみ利用した(デシャン1989)。また彼らによって、この島全体の住民・土地を示すマダガスカルという言葉の使用が始まった。

17世紀になると、ポルトガルによる宣教活動や、イギリスとフランスによる海洋交易のための拠点作りが開始される。イギリスに比べれば積極的であったフランスによるマダガスカルへの入植は、南東部を中心に30年ほど国家事業として実施されたが、現地住民との軋轢によって18世紀を待たずに撤退することになる。18世紀と19世紀初期は、海賊と奴隷商人が闊歩する時代であった。マダガスカルにおける人口密度は20世紀の初めの段階でも¹⁸⁾、1平方キロメートルあたり4人とかなり粗密であり(デシャン1989)、王国における労働力不足を補

填するため、アフリカ大陸より奴隷が輸入された¹⁹⁾。

19世紀はイギリスとフランスによるマダガスカルへの外交交渉が始まった時代である。19世紀初頭のイギリスは、パリ条約によって得たモーリシャス島を足掛かりに、マダガスカルへの進出を開始した。イギリスは、当時中央高地より急速に拡大していたメリナ王国とのあいだに、1817年友好通商条約を締結している。ラダマー世は当時ヨーロッパにおいて潮流となっていた奴隷貿易の禁止と宣教師の派遣を要求されたが、同時に見返りとして補助金や軍備、技術者の供与を受けた。メリナ王国は英式の軍事力を背景に、1828年までに島の3分の2ちかくを勢力下においている(深澤 2009)。フランスはイギリスに出遅れたものの、1821年東海岸にあるサン・マリー島を占拠し、同時にメリナとの抗争により北西部のヌシ・ベ島周辺に逃げ込んだサカラヴァを保護した(勝岡 1962)。

マダガスカルの権益をめぐるフランスとイギリスの外交上の争いは、19世紀終わりまでマダガスカルの植民地化を防いでいた。しかしこれもフランスがエジプトとザンジバルにおけるイギリスの自由裁量権を認めたことと引き換えに、イギリスがマダガスカルより手を引くことで終焉した。フランスが具体的にマダガスカルの領有化に動くのは、1882年である。いくつかの外交上の諍いを理由にして、フランスはマダガスカルと国交断絶を発表、1883年の第一次フランス・メリナ戦争、1895年の第2次フランス・メリナ戦争を経て、1896年マダガスカルの植民地化を宣言した。

3. マダガスカルのナショナリズムの高揚

3-1. アフリカにおけるナショナリズム

マダガスカルにおけるナショナリズムを論ずる前に、まずアフリカ全体のナショナリズムについて俯瞰する。なお、本稿では「国民」を近代国家形成とともに現れた政治や経済、様々な文化内容を共有する大集団を表す語句として用い、マダガスカルにおいては、「マダガスカル人」と「国民」を同様の言葉として言及する。

また「民族」については、マダガスカル人という単位が浸透してからも現代のマダガスカル全土において各地域と結びつくかたちで認識される個別の小集団 *foko* の訳語として使用する。上記以外に「部族、族」の用語を用いるが、それらは過去の植民地時代の行政単位としてのみ使用する。部族、族は共通の歴史や言語、認識などの社会的要因を共有するとされ、植民地時代に宗主国政府によって定められた小集団である²⁰⁾。マダガスカルにおいて、それらはフランス植民地時代 *foko* と同様の単位であった。

アフリカ大陸におけるアフリカ人によるナショナリズムは、川端(2002)によって大きく3つの時期に区分される。第1期は、アフリカ分割から第2次世界大戦までの初期ナショナリズムの時期である。第2期は、第2次世界大戦からアフリカ独立の年を経た冷戦終結までのナショナリズムが開花した時期であり、第3期は、冷戦終焉後の現在のナショナリズムである。しかしどの時期であっても、その特性は、帝国主義の植民地支配に対抗し、アフリカ人の自決を要求する運動のなかで誕生している(川端 2002)。アフリカ・ナショナリズムは、Mutiso(1975)によって8つに定義されたように²¹⁾多義的に使用されるが、あらゆる形態の植民地支配に抵抗し、それからの解放を求め同時に植民地支配と結びついていた封建的勢力に対立するという点において共通している(梅津 1977)。

現代アフリカにおいて文化や言語、民族を考える場合、国境はひとつの線引きにすぎない。言語地図は国の地図と比べるとほとんど重なっておらず、現代アフリカ人の多くは多言語を使って生活しており、同じ場所に異なる言葉を話す集団が暮らしていることも珍しくない。民族の境界線も同様、生活様式や同族意識をもとにした境界線も、今日もはや固定的ではない。アフリカ諸国が独立を果たしてから50年以上が経ち、民族の違いを超えた「国民文化」も形成されていることも無視することはできない(松村 2014)。

アフリカ諸国家はすべて多民族構成である。植民地時代に確定した国境線は独立後にも踏襲され、今も国家によって分断状態にある民族

も少なくない。多様な民族構成に伴った内戦の絶えない国もある。一般にアフリカでは、植民地宗主国が住民を不動化するために民族を作ったことで、19世紀以降、民族間の関係が多様化したと言われている。同時に他の民族との関係における異民族観も形成、ステレオタイプ化していった民族関係に様々な影響を及ぼした。現代において国境が争いの種になることが多いのは、国境を挟んで住んでいる民族が、所属する国家によって生活条件が異なることが多いからである(和田 2001)。

アフリカ国家の国境線の多くは、植民地時代に確定した境界線を独立後も踏襲したものである。アフリカ人のナショナリズムは、歴史や言語、民族の枠を超えた他者によって作られた境界線のなかで発展させる必要があった。そのような植民地遺制としての国民国家は、ヨーロッパ列強との関係のなか²²⁾形成され、独立後もその影響を受け続けた(松村 2014)。アフリカ・ナショナリズムは、植民地主義に反対し、独立を目指し、自分たちの国家をもとうとするアフリカ人の思想と運動である(川端 2002)。

3.2. マダガスカルにおけるナショナリズム

1) フランスによるマダガスカル支配

1896年フランス議会におけるマダガスカル植民地領有化宣言から、1960年マダガスカル共和国独立宣言までが、マダガスカルにおけるフランス植民地時代である。メリナ王国との間に保護領化承認の条約を結び、その封建制度を廃止したフランスは初代総督としてガリエニを任命し、直接統治によってマダガスカルを治めた。マダガスカルにおけるガリエニの初期統治は、メリナ王国が達していなかったマダガスカル全土の征服と各地反乱の鎮圧から始まった。1895年時点で、サカラヴァなど一部の東部、南部の地域の諸王国は、メリナ王国、フランス両国に反発し、独立を保っていた。

また旧メリナ王国支配地域内でもフランス支配に対抗する住民によって反乱が勃発していた。これらの動きは段階的にそして散逸的にマダガスカル全土でおこった蜂起であり、さらにその動機は侵略や王都蹂躪に対する反抗、もしくは伝統宗教への復古やキリスト教への反

発など様々であったが、フランスの侵攻に対する反発という点において一致していた。しかし蜂起した住民の動きに連帯はほとんどなく、1905年までに全島の平定は完了した²³⁾(エスアヴェルマンドルウス 1988, デシャン 1989)。

ガリエニによる植民地統治体制は、他のフランス植民地と同様に直接統治である。彼は同化政策にもとづき、地方ごとの習慣を無視した画一的な施政をマダガスカル全体に実施した(勝岡 1962)。一方で地方行政については、行政区分を部族にもとづいて分割し、各部族の首長を中心として中央からの政策を実行させた。また、すでにマダガスカルの広範囲にいきわたっていたメリナ王国の行政制度もフランス政府は利用した(飯田 2006)。メリナ族は他部族に比べ高い識字率や行政事務能力を有していたことから、官吏として重用され、地方で活躍した(深澤 2009)。しかし同時にフランスは、マダガスカルに住む人びとが団結して反抗してくる可能性も思慮に入れ、部族ごとの地方行政や、自分たちを為政者メリナからの解放者であると宣伝することなどによって、島内に住む人びとを分断して統治を進めようと図った²⁴⁾。このような政治手法は分割統治と呼ばれる(飯田 2006)。

フランスによる資本輸出や経済的搾取が拡大していくなか、それらはインフラストラクチャーの整備や無償労働、人頭税の導入など現地民の前にも目に見えるかたちとなって現れるようになる。1905年にフランス政府がマダガスカル全土を平定、植民地化が完了して以降も、政策や統治への抵抗は断続的に起こっていた。反乱などの目に見える反発以外に、植民地支配に対する消極的抵抗²⁵⁾も、第一次世界大戦までのこの時代に出現した。

第一次世界大戦から両大戦間期までは、マダガスカルにおいてナショナリズムが高揚した時期であるといえるであろう。フランスは戦況に耐えるため、植民地において兵士や労働者として現地人の徴用、物資の過剰供給などを実行させた。これらによる貧困を理由とした反発がマダガスカル内で高まったことはいうに及ばず、同時にマダガスカルの現地民が、外部社会と接触した²⁶⁾ことが民族主義運動に繋がっていく(森山 2013b)。この期間において主張された

ことは、マダガスカルにおける自治権の獲得や、フランス市民権の獲得であり、必ずしも独立に結びつくものではなかった。しかしそれらの運動も、世界恐慌や第2次世界大戦を理由とする植民地経済への影響から、両大戦間期後、1929年から1945年まで勢いを失っている(深澤2009)。

第2次世界大戦においてフランスは、パリ占領を経験したのち、ヴィシー政権に対独協力政府として発起させた(渡辺2001)。陸軍少将であったド・ゴールは、イギリス軍の協力を得るため滞在していたロンドンからドイツ占領軍に抵抗するよう植民地を含む各地のフランス人に呼びかけ、フランス本国を解放するため、1940年に自由フランス軍を結成しドイツに対抗した(渡辺2001)。フランス本国が対独協力政府として樹立したあと、植民地マダガスカルの官吏たちはヴィシー政権に従うことを決めたが、その動向を危惧したイギリスによって、1942年マダガスカルは占拠されている。イギリス軍に降伏したマダガスカル植民地政府であったが、1943年にド・ゴールとイギリスの間で調停がなされたことで、自由フランス側に支配権は移譲され、新たに総督が派遣された(深澤2009)。

再びフランスの支配が始まるとともに、その支配に対する反発と、植民地政府による米統制から来る米不足、戦争による人員、物資の供給による貧困を理由とする反発が起こった。その二つの反発を源にして、戦争以来自粛されていたナショナリズムが再び高まり始める。運動は「マダガスカル社会主義国民党」や「愛国青年同盟」の結成や活動によって如実に表れている。また1945年よりマダガスカルの現地民が代議員としてフランス本国の議会へ参加することが決まり、各地に政党が結成され始める。最も大きな政党は、メリナを中心とする「マダガスカル改革民主運動党(MDRM)」であり、本国議会にマダガスカルの政党のなかで唯一、2名の議員を派遣した。MDRMは、マダガスカル各州に設置された地方議会においても過半数の議席を獲得し、フランス連合内での自由国としての権利を求めたが、MDRMの主張は通らなかった。第2次世界大戦の終結した1946年を経て

も依然マダガスカルはフランスの海外領土であった(深澤2009)。

1947年3月29日夜半から30日未明にかけて、マダガスカルの各地で同時に反乱が勃発した。民衆はフランス人移民や官吏を襲撃した。反乱域は一時、フランス行政政府のあるアンタナナリボの手前にまで迫ったが、反乱側の持つ近代的兵器が少なかったことや、組織化が不十分であったことから、勃発から2週間ほどで主要な町はフランス側に制圧され、その後フランス軍が海外より増援部隊を得たことで、1948年には農村部や山間部に逃げこんだ武装抵抗勢力の掃討も終了した。

反乱後、フランス政府はMDRM構成員を含め多くの逮捕者に重罪をくだした。フランスによる苛烈な弾圧はマダガスカルに恐怖を植え付け、分離独立の主張は大きく後退した(深澤2009)。1956年非メリナの人びとを中心とした「社会民主党(PSD)」の創立者ツィラナナがフランス本国議会議員に選出され、1958年の国民投票によって独立が採択された。1960年マダガスカルはツィラナナを初代大統領として、フランス共同体内で独立を宣言した。

2)マダガスカルにおけるナショナリズム

アフリカにおけるナショナリズムは、民族連合たる国民を認識し、その集団によって国家を形成する思想である。アフリカにおける現代国家を形成する国境線の多くは、植民地時代のもを踏襲したものであり、その枠内に住む国民もまた、植民地時代に定められた民族の連合集団である。現代アフリカ国家設立の礎であるアフリカ・ナショナリズムは、その出現からして、植民地を通じた西欧諸国との関係のなかで形成された。

しかしマダガスカルにおけるナショナリズムは、その思想の発端の全てが、植民地を通じた宗主国フランスとの関係性のなかで形成されたものではないことを指摘しておきたい。マダガスカル島という地理的条件を基盤とするマダガスカル人という政治主体の覚醒は、これまで多くの場合、植民地統治の開始とともに登場したと語られてきた。

アフリカの諸国家のなかで、自然国境のみに囲まれた国家は少ない。多くの場合、歪な直線

の人為国境線に代表されるよう、植民地遺制である西欧諸国によって定められた国境が、現在でも使用されている。そのような見地から考えると、マダガスカルはアフリカ地域において、最も大きい自然国境線に依拠した国家であると同時に、西欧諸国によって形作られていない国境をもつ、最も広大な面積を有する国家であるといえるであろう。マダガスカルを除くアフリカ国家において、国家形成の基盤となった国境という枠組みは宗主国によって制定されたものであり、その地域内に住む民族あるいは国民でさえも宗主国によって一方的に定められた存在であった(梅津 1977)。

そのようなアフリカ地域にあってマダガスカルに住む人びとのみは、周囲を海に囲われた島嶼国という地理的な条件のなか、ヨーロッパ人によって定義される以前から歴史や文化などの諸要因においてナショナリズムに至りうる同一性を育むことが可能であった。またマダガスカルの住民は、その同一性を有す集団の領域を、海洋によって隔絶されたマダガスカル島に限定することができた。アフリカ分割期にナショナリズムの発現を認めるアフリカ大陸における諸国家とは異なり、マダガスカルにおけるナショナリズムの目覚めは植民地時代以前に言及することができる。

3) マダガスカルという名称

マダガスカルという名称の由来は、一説によればマルコ・ポーロによる『東方見聞録』にある。マルコ・ポーロは同書において、ソマリアの都市モガディシュをモグダシオと記述し、さらにそれを島であると紹介した(デシャン 1989, 深澤 2009)。アフリカ大陸の東に存在するマダガスカル島を発見した 16 世紀のヨーロッパ人が、モグダシオから同島をマダガスカルと名付けたことは理解ができる。16 世紀以降、主に西欧諸国によってマダガスカル²⁷⁾という名称は島と島に住む住民全体をさす言葉として使われるようになった。

マダガスカル島をひとつの地域として意識した行動は、勝岡(1962)によって 16 世紀のサカラヴァの王国に遡ると言及されている。サカラヴァによるマジュンガ王国は 16 世紀に南西部より北進して領土を拡大した。また北部のベツ

ミサラカや中央のメリナによっても、限定地域に留まるが征圧が実施された(勝岡 1962)。これらの征服が、マダガスカル島全土統一を目指した行動であるかは、現在では推察の域をでない。しかし同時代前後において、すでにヨーロッパ人によってマダガスカルを島とする地図が発行されており(図 3)、マダガスカル島が限定された空間であり、統一が不可能でないほどの領域であることは各地の諸王国において意識されていたであろう。

歴史的にマダガスカル島全域の統一を目標としたであろう最も古い記録は、19 世紀のメリナ王国である。メリナ王国は、18 世紀終わりよりアンヂアナンピニメリナ王のもとで領域の版図拡大を開始した。同王が即位した 1787 年時点では中央高地の小国のひとつでしかなかったメリナ王国は、同王の死去までに地図のように勢力を広げている(図 4)。1810 年息子であるラダマー一世が即位したあとも、周辺王国へ攻勢は続いた。またラダマー一世とイギリスとの間に友好条約は結ばれたことは、この後メリナ王国の繁栄を決定づけることとなった。

この友好条約は、メリナ王国に近代的な軍備や技術者の派遣など直接的な支援を与えたが、それよりも特筆すべきは、それまでマダガスカルにおける一王国でしかなかったメリナ王国が、マダガスカルにおいて唯一イギリスに注視され、さらにマダガスカル全土の盟主として「マダガスカル王」という称号を名乗ることを認められたことである。イギリスからすれば、この「マダガスカル王」の承認は、イギリスの影響力が一国からマダガスカル全土へわたることを期待しての思惑だったのであろう。しかしこの出来事は、マダガスカルの住民にとって島に住む全ての人びとや領域に対する名乗りを初めて手に入れた歴史的な瞬間であった(深澤 2009)。メリナ王国は、フランス植民地時代までにその領域を島の 3 分の 2 にまで拡大している。メリナ王国は、教育を受けたメリナの人びとを行政官として各地に派遣し治めさせた。このような、メリナ王国による地元の首長に頼らない画一的な組織体制と政治制度は、フランス植民地政府にも引き継がれていく。



図3 1595年のオランダ人ハウトマン、
によるマダガスカル地図
(森山(2006: 7)より引用)

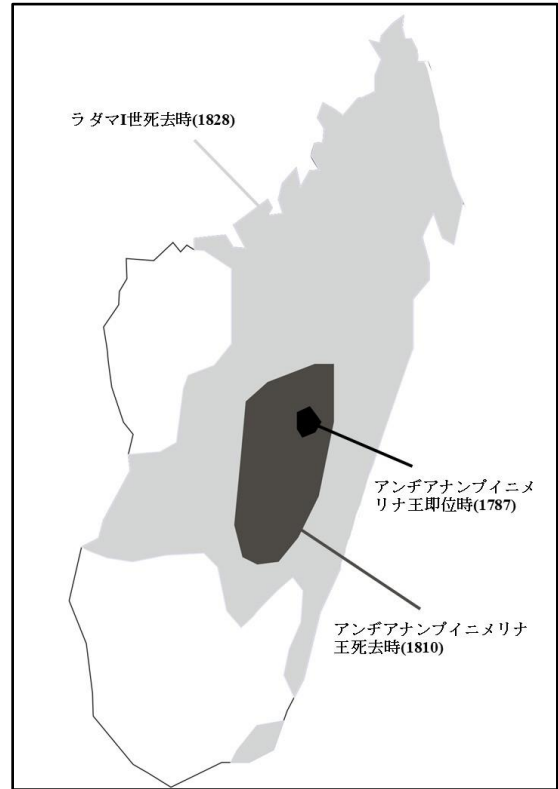


図4 メリナ王国による勢力の拡大図
(勝岡(1962: 101)を一部改変)

4)マダガスカル・ナショナリズムの起源

西欧諸国は16世紀のマダガスカルの発見以降、一貫してマダガスカルをひとつの地域として捉えていた。それらはマダガスカルという地域の名称やそこに住む人びとへの呼称、また英仏による対マダガスカルの外交上の扱いからも読み取れる。

マダガスカル島に住む人びとは、はじめは島を多様であり、自らの所属と異なるいくつもの集団が存在すると認識していた。今日まで続く民族という区分は、島が多様であると認識されていたことの名残であろう。

しかしマダガスカルの住民も時代を経るごとに、外界から地理的に孤立したマダガスカル島のなか、民族による征服や外部との関係性において、緩やかな連帯感を認識していくことは必然である。その連帯感の醸成はマダガスカル島に住む人びとをひとつの集団、マダガスカル人として捉えたナショナリズムの黎明期と位

置付けることができる。

アフリカ・ナショナリズムは、植民地時代、宗主国に支配されることで、その枠内で始まった思想と社会運動である。マダガスカル・ナショナリズムは、その枠が古くから明瞭に存在し、緩やかなナショナリズムの起源を植民地時代以前にさかのぼることができる点でアフリカ・ナショナリズムとは性質を異にするものといえる。

マダガスカル・ナショナリズムとは、マダガスカルに住む人びとが自らをマダガスカル人という一集団として認識する思想である。その思想が極限化すれば、独立という形で現実に表象されることになる。マダガスカル・ナショナリズムの高揚、人びとが島に住む人を同質の集団であると認識する情勢には段階があり、私はその第1段階として起源を植民地前時代に位置づけた。マダガスカル・ナショナリズムは、段階によって、認識させる対象によって、4つの

側面に細分化することが可能である。

ひとつめは植民地時代以前、西欧諸国との関係性や島内の征服過程のなか醸成された、島全体を境界とした連帯感としてのナショナリズムである。

2番目はアフリカ・ナショナリズムにおいて象徴される植民地主義への抵抗から出現するナショナリズムである。マダガスカルにおいても、1896年以降、宗主国フランスへの反発が運動を伴った思想として展開される。

3番目はフランスの同化政策によって受動的に育まれたナショナリズムである。同化政策は植民地を直接統治によって文明化させ、いずれ現地民をフランス市民にしようという施策である。そのような方針にともない、マダガスカル全土では地方自治にまかせるのではない画一的な政治が実施され、例えば今日において主流のマダガスカル語メリナ方言とフランス語の普及が実施されたことを例に挙げることができる。これらは宗主国の理想ではあったが、マダガスカルに住む人びとをフランス本国と同様の教育水準にすることを目指したものであり、最終的なフランスとの同化の前段階として、マダガスカル内部の連帯感を養うこともできた。

4番目はフランス以外の海外の影響を受けて生まれたナショナリズムである。第2次世界大戦時、ヴィシー政権を支持したマダガスカルのフランス植民地政府は、イギリスによって占領され、短い期間ではあるがイギリスの支配下に置かれている。マダガスカルの現地民にとって不敗であったフランス人の敗北する姿は、その不敗伝説の瓦解とともに、フランス人への対抗の可能性としてさらなるナショナリズムの高揚を促した。また両大戦期、マダガスカルから徴用された植民地兵の帰還も、ナショナリズムにおいて大きな影響を与えている。兵士はフランス兵とともに海外に出兵することで、各地の民族主義の様子やフランス本国の実情を見聞きし、情報を手にした状態で帰国することができた。帰還兵の情報ははじめとする外部世界の刺激は、マダガスカル民衆に広く刺激を与えた(勝岡 1962)。

3-3. 1947年マダガスカル反乱

前述したマダガスカル・ナショナリズム4つの側面が全て国内において出現し、その高揚が広範に全土に広がったのが、第2次世界大戦後のマダガスカルである。マダガスカル島に住む多くの人びとが、自らを意識的に一つの集団とみなす思想がこの時期全国に浸透した。また同時にその思想は、マダガスカルはマダガスカル島に住む人間によって統治されるべき、すなわち独立主義という思想を産んだ。思想は行動に繋がり、結果、1947年に反乱という形になって現れた。

1947年マダガスカル反乱が勃発した際、マダガスカル島には大きく分けて3種類の人びとがいた。マダガスカル人を意識し独立を望む人、マダガスカル人を意識しフランス国内で権利を得ようとする人、マダガスカル人よりも民族を意識する人である。反乱を勃発させた過激派は、マダガスカル人を意識し、かつ独立を望む人びとによって形成された。マダガスカル国内において、そのような考えを抱く人びとは植民地化以降、年々増加していたが、前項の2番目と4番目の側面から、ナショナリズムの理念が1947年直前に急速に広がったと考えられる。

2番目については、植民地化以降、時を重ねるごとに累積していた支配そのものに対する反発とともに、フランス政府による当時の統治政策にナショナリズム出現の要因がある。第2次世界大戦においてフランスは多くの物資を必要とした。資源がマダガスカルからも接収されたことや、フランスからの輸入に頼っていた工業製品や燃料の停滞によって、戦中から戦後にかけてマダガスカル全域の経済情勢が圧迫された。中でも住民の重要な主食作物である米を管理する米穀局による徴発と、農園における労働力の強制徴用は、島内経済を圧迫し、民衆に広範な反感を増長させた(深澤 2009, 勝岡 1962)。またメリナ以外の人びととフランスの支援によって「マダガスカル棄民党(PADESM)」が結成されたこと、マダガスカルが行政区分として5州に分けられ、各州に議会が設置されたことは、フランスが分割統治によってマダガスカルを膠着状態に陥れようとしていると、主に

MDRM によってみなされ反発が強まった(深澤 2009)。

4 番目については、第 2 次世界大戦中マダガスカルにおいて、イギリス軍によってフランスが敗れたことがまずひとつである。フランス人の不敗伝説が崩れ、多くのマダガスカルに住む人びとが反乱を現実的に考える機会を得たことは、武装蜂起も辞さない秘密組織の結成につながっていく。次に第 2 次世界大戦後に帰還した兵士の存在である。ブラザヴィル会議やサンフランシスコ憲章における新時代の到来、ベトナムやインドをはじめとするアジア・アフリカ諸国家の独立宣言はマダガスカルの知識層から民衆に至るまで強い影響を与えた。

これらの状況は第 2 次世界大戦期もしくは戦後に連鎖的におこった出来事である。また 1946 年、反乱の約半年前には、MDRM が本国議会において唱えてきたマダガスカルにおける自治権の確立についていっさい触れられていない憲法が採択されている。

1947 年マダガスカル反乱がフランスに対する反抗として全国で勃発したことは、前年までに起こった様々な出来事によってナショナリズムがさらなる広がりを見せ、マダガスカルにおいてマダガスカル人と独立の双方を意識する人びとが島の多数派となっていたことを意味する。1947 年反乱以前に起きた全ての反乱は単発的なもの、もしくは民族的アイデンティティーに依拠して組織されたものであった。

1947 年反乱において蜂起した住民は、マダガスカル・ナショナリズムにおいて奮起されマダガスカル島の独立のためマダガスカル人として立ち上がった人びとである²⁸⁾。反乱はフランス植民地政府によって徹底的に弾圧され、独立を求める運動としては失敗した。しかし、反乱において 18 民族を象徴する 18 の星を配した国旗が押し立てられるなど(勝岡 1962)、私はこの反乱の真の意義を、蜂起が全土で勃発し、マダガスカル人の集団的アイデンティティーが確立されたという事実にあると考えている。

1947 年マダガスカル反乱の全容は、フランス政府によって統制が敷かれ、死者数や首謀者など今日でも詳しいことはわかっていない。当時のフランスやアメリカ、イギリスの新聞におい

ても、反乱における記事は掲載されなかった。反乱によって死亡した現地民の総数は資料によって 1 万人から 10 万人まで差異がある。またフランス政府によって、反乱の首謀者は MDRM であると断定され、MDRM の指導者を含めた構成員の多くが逮捕された。MDRM 構成員が反乱に関わったとはいえ、組織として MDRM が反乱を画策し指導したとの見方は現在では否定されている(深澤 2013a)。1947 年のナショナリズムの高揚は、マダガスカルに住む多くの民衆に広く拡大していたもので、高揚もその結果としての反乱も MDRM によって組織的に画策されたものではない。ナショナリズムは、それまでの様々な歴史的要因によってすでにマダガスカル島全土の住民に広がっており、反乱はそれに火をつける形で全国において勃発した結果にすぎない。

4. おわりに

自集団をひとつのまとまりとして定義するとき、彼らにとって指標となる共通の何かが必要不可欠である。多くの場合それは歴史や言語などの諸文化によって定義され、それらを中心に住民はアイデンティティーを構築する。そのような自集団の共通認識、または異なる他集団の認識によって、集団をひとつのまとまりとして捉える思想がナショナリズムである。アフリカにおいては、そのほとんどの国家に複数の民族が共存する。多民族国家にとって、国民に連帯感を抱かせる共通の存在が必要であるが、明確に国民にそれを示せる国家はさほど多くなく、国民たるアイデンティティーの構築が困難な国は今なお多い。

そんなアフリカ国家のなかにあって、マダガスカルは、多くの国民が有効ないくつかの共通項を抱いている。それは言語であり、東南アジアに由来をもつ歴史であり、海に隔たれたマダガスカルという島である。また、ひとつの国家によって支配されていたということもまたナショナリズムを高める有効な素材になりうる。1947 年マダガスカル反乱までに育まれたそれらのアイデンティティーは、現在まで、人びと

がマダガスカル人であることを認識する材料として受け継がれている。

1947年マダガスカル反乱は、それまでの全国的なナショナリズムの高揚の結果として起こったにすぎない。組織的な団結によって勃発したわけではないこの反乱が、散発的に全土で勃発し、フランスに敗北した。しかし1947年反乱の意義は、そのような結果にあるのではなく、マダガスカルに住む人びとが初めてマダガスカル人という一集団として行動したことにある。

フランスはマダガスカル支配において、ある側面ではメリナ族と非メリナ族を分割した統治政策を展開した。フランスは植民地化初期時代よりメリナ族によって、弱者・被抑圧者されていた人びとの解放者として振舞った(バンセルほか 2011)。1947年反乱後においても、メリナ族中心のMDRMを弾圧し、非メリナ族を中心とした政党を支援し、フランス共同体内で独立させている。これらの目的はマダガスカルにおける全人口が団結した反乱の阻止であったが、1947年反乱の団結のない全国蜂起によってその政策の破綻は垣間見えている。独立後の1975年、ツィラナナ大統領が分離政策を想起させるメリナと非メリナの対立を利用した政治運動を展開したときには、多くのマダガスカル人から批判があがった。当時の野党は「マダガスカル人とは一にして不可分で、分断することのできない国民である」と訴えかけている(森山 2006)。このような事実からも、フランスによって形成されたメリナ族と非メリナ族対立の図式は、1947年反乱までに高揚したマダガスカル人としてのアイデンティティによって多く払拭されたと言及して良いだろう。それらには、島内に住む人びとの自発的な島外への他者認識、島内への自己認識とは別に、フランスによる同化政策のなか受動的に育まれた集団統一の側面もあった。マダガスカルにおいては、*foko* と呼ばれる 18 種類の人びとが存在するが、その全ての人びとが民族意識と国民意識を 2 項並列で抱くマダガスカル人なのである。

謝辞

本論文は、2017年度に早稲田大学教育学部社会科地理歴史専修に提出した卒業論文の一部である。論文作成に協力していただいた小森宏美氏にはお世話になりました。記して、感謝を申し上げます。

(早稲田大学教育学部社会科地理歴史専修 学士課程 2017年度修了; 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科アフリカ専攻 博士課程 在学)

注

- 1) 本国から離れた欧人移住地、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどをさす(デシャン 1954)。
- 2) たとえば人口増加にともなう食糧需要の増大、工業生産物供給の増加など。
- 3) イギリスも反抗の絶えない地域では直接統治を実施した(西川 1971)。
- 4) ラドヤード・キプリングの詩に由来する(バンセルほか 2011)。
- 5) 海外においてフランスは、軍事的地位を確立させることと並行して、文明化、人間の進歩を使命であるとしていた。
- 6) *foko* は馬英辞書によれば(Andro Vaovao 2004)、英語で”tribe, caste, group”と訳される。森山は人びとのカテゴリーをあらわす固有名詞として”民族”と訳している(森山 2006)。今日マダガスカルにおいて *foko* と区分される存在のほとんどは、同一の地理的環境や同一の歴史上の王国のなかで結合した雑多な起源の人びとが寄り集まって成立した集団が多い(デシャン 1989)。
- 7) 現在のマダガスカル国内においても、主に中央高地に暮らす民族、メリナは色が白くアジア的であり、主に西海岸に暮らす民族、サカラヴァは肌が黒くネグロイド的である(山口 1991)と、民族ごとの特徴が言及されることも多い。

- 8) ひとつの民族を表す固有名詞。中央高地の南部に多く居住する。
- 9) ひとつの民族を表す固有名詞。最南端地域に多く居住する。
- 10) アフリカ史全体を俯瞰した資料など。
- 11) ひとつの民族を表す固有名詞。中央高地に多く居住する。支配民族として台頭した。
- 12) ひとつの民族を表す固有名詞。北部高地に多く居住する。
- 13) 伝統的には直播だが(森山 2013)、現在では移植法の伝来によって直播水田耕作、焼畑耕作の割合は相対的に低くなっている。
- 14) 近代以前のマダガスカルにおける民族集団ごとの歴史は、西欧諸国による史料を除けば、口語によって伝承されている。
- 15) ベツミサラカなど(デシャン 1989)。
- 16) メリナやベツレウなど(デシャン 1989)。
- 17) サカラヴァやアンテサカなど(デシャン 1989)。
- 18) 1905 年の推計で 260 万人というフランスによるデータまで詳しい人口推定はない(デシャン 1989)。
- 19) モーリシャスなど、近郊の島嶼部に奴隷として自国民の輸出も実施していた(鈴木 2013b)。
- 20) 現在、民族名称に部族もしくは族という言葉を用いることについて、差別的なニュアンスを含むと指摘される場合があるが、本稿においてはそのような意図はなく、植民地時代の行政単位を表現するためにのみ「部族、族」の語句を使用する。
- 21) ムティソは、①文化的民族主義(植民地主義に否定されたアフリカ文化の主張)、②哀願民族主義(宗主国や植民者に同化保護されたいと願う)、③急進民族主義(植民地主義と帝国主義に反対し民族独立を求める)、④人種主義(植民者と被植民者の間に平等はないと植民者は考える)、⑤パン・アフリカ民族主義(自由戦士を応援し独立と解放を確保する)、⑥新植民地主義(付与された植民地の独立は形式的にすぎないと考える)、⑦統合的民族主義(社会主義や一党制で国家を統合する)、⑧非同盟主義(アフリカ的非同盟主義)の 8 つのカテゴリーに分類できると論じた(Mutiso 1975)。
- 22) 独立を保持していたエチオピア帝国なども、欧米列強がアフリカへ進出してくるなか、周辺民族の統合と、ヨーロッパ諸国との外交交渉でその領域を承認させた(松村 2014)。
- 23) 例外として、1895 年のメリナ王国の敗北を反撃の好機ととった一部の非メリナの人びとが、メリナを攻撃する戦闘もおこっている。しかしその動きも最終的にはフランスへの反抗に繋がり、鎮圧されている(エスアヴェルマンドルウス 1988)。1895 年から 1904 年までのマダガスカル各地の反乱において、人びとは多様な方法で反抗を示したが(フランス軍への抵抗以外にも、メリナへの攻撃、外国人宣教師の虐殺など)、その最終的な反抗先はフランスに集約され、鎮圧された。
- 24) フランスがメリナ族対非メリナ族の構図を意識していたのは確かであり、フランス対マダガスカルの住民という対立を起こさせないようにした。これはのちの政治政策にまで影響を与えている。
- 25) 命令への不服従や、同化あるいは文明化(就学や労働)への拒否など。秘密結社「Vy Vato Sakelika (VVS)」の結成もこの時期であり、新聞や論文での意見発表を通してその活動を拡大していった。1915 年に組織は摘発されたが、VVS のメンバーはのちの民族主義運動にも関わっていく(エスアヴェルマンドルウス 1988)。
- 26) 具体的には外国人兵士として海外に出兵した者や、留学生としてフランスに渡ったものなど。
- 27) あるいはマダガシ、マラガシ(デシャン 1989)。
- 28) 一部の村落においては、個別の民族として独立を画策していた。

参考文献

Andro, Vaovao. 2004. *Diksonera Malagasy-Rnglisy*. Antananarivo: Trano Printy Loterana.

- 飯田 卓 2012. 地域研究の舞台としてのマダガスカル——序にかえて. 国立民族学博物館調査報告 103: 5-22.
- 飯田 卓 2013. 最初のマダガスカル人. 飯田卓・深澤秀夫・森山 工編『マダガスカルを知るための 62 章』80-82. 明石書店.
- 梅津和郎 1977. 『アフリカ現代史』泰流社.
- エスアヴェルマンドルウス, M 著, 深澤秀夫訳 1988. マダガスカル, 1880 年代から 1930 年代まで——アフリカ人の主体性と植民地征服・支配に対する抵抗. 宮本正興編『ユネスコ アフリカの歴史 第 7 巻』322-369. 同朋舎.
- Esoavelomandroso, M. 1990. Madagascar from 1880 to 1930: African initiatives and reaction to colonial conquest and domination. In *Africa under colonial domination 1880-1935*, ed. A. Adu Boahen, 108-132. Paris: UNESCO
- 勝岡 宣 1962. マダガスカル. 宍戸 寛編『アフリカのナショナリズムの発展』85-125. 東京大学出版会.
- 川端正久 2002. 『アフリカ人の覚醒——タンガニーカ民族主義の形成』法律文化社.
- 木谷 勤 1997. 『帝国主義と世界の一体化』山川出版社.
- ヤコノ, X 著, 平野千果子訳 1998. 『フランス植民地帝国の歴史』白水社. Yacono, X. 1993. *Histoire de la colonisation française: Que sais-je?*. Paris : P.U.F.
- 宍戸 寛 1962. 総括. 宍戸 寛編『アフリカのナショナリズムの発展』9-26. 東京大学出版会.
- 杉本星子 2013. サカラヴァ王国——畏れらえる王の霊力. 飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編『マダガスカルを知るための 62 章』228-231. 明石書店.
- 鈴木英明 2013a. インド洋交易. 飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編『マダガスカルを知るための 62 章』94-98 明石書店.
- 鈴木英明 2013b. 奴隷交易ネットワーク. 飯田卓・深澤秀夫・森山 工編『マダガスカルを知るための 62 章』114-118. 明石書店.
- 西川 潤 1971. 『アフリカの非植民地化』三省堂.
- バンセル, N・ブランシャール, P・ヴェルジェス, F 著, 平野千香子・菊池恵介訳 2011. 『植民地帝国フランス』岩波書店. Bancel, N. Blanchard, P. And Vergès, F. 2003. *La république coloniale: essai sur une utopie*. Paris: Albin Michel.
- 平野千果子 2002. 『フランス植民地主義の歴史, 奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院.
- 深澤秀夫 2009. マダガスカルとインド洋西域島嶼世界. 川田順造編『世界各国史 アフリカ史』152-201. 山川出版社.
- 深澤秀夫 2013a. 1947 年マダガスカル反乱. 飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編『マダガスカルを知るための 62 章』150-154. 明石書店.
- 深澤秀夫 2013b. フランス・メリナ王国戦争とメナランバの乱. 飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編『マダガスカルを知るための 62 章』128-132. 明石書店.
- 深澤秀夫, 飯田 卓, 森山 工 2013. はじめに. 飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編『マダガスカルを知るための 62 章』3-5. 明石書店.
- Hodgkin, T. 1956. *Nationalism in colonial Africa*. London: Frederick Muller.
- 松村圭一郎 2014. 民族と文化. 松田素二編『アフリカ社会を学ぶ人のために』18-29. 世界思想社.
- Mutiso, G, M. Rohio, S, W. 1975. *Readings in African Political Thought*. London: Heinemann Education Books.
- 森山 工 2006. 〈民族〉と〈国民〉の語り. 深澤秀夫編『インド洋の十字路——マダガスカル』6-20. 葫蘆舎.
- 森山 工 2013a. 民族. 飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編『マダガスカルを知るための 62 章』160-164. 明石書店.
- 森山 工 2013b. 第一次世界大戦. 飯田 卓・深澤秀夫・森山 工編『マダガスカルを知るための 62 章』143-146. 明石書店.
- 山口洋一 1991. 『マダガスカル——アフリカに一番近いアジアの国』サイマル出版会.
- デシャン, H 著, 松本平治訳 1954. 『帝国主義の没落』白水社. Deschamps, H. 1950. *La fin des empires coloniaux: Que sais-je?*. Paris: P.U.F.

デシャン, H 著, 木村正明訳 1989. 『マダガスカル』 白水社. Deschamps, H. 1968. *Madagascar: Que sais-je?*. Paris: P.U.F.
Lenin, V. 1917. *Imperialism, the Highest Stage of Capitalism*. Petrograd: Shinnihon Press

和田正平 2001. 『現代アフリカの民族関係』 明石書店.
渡辺和行 2001. 現代のフランス. 福井憲彦編『世界各国史——フランス史』 371-445. 山川出版社.